青森県埋蔵文化財調査報告書　第614集

沖附（１）遺跡Ⅲ

－日本原燃株式会社再処理事業（防火帯設置工事）に伴う遺跡発掘調査報告－

２０２０年３月

青森県教育委員会

第614集　沖附（1）遺跡Ⅲ　二〇二〇・三　青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書　第614集

沖附（１）遺跡Ⅲ

－日本原燃株式会社再処理事業（防火帯設置工事）に伴う遺跡発掘調査報告－

２０２０年３月

青森県教育委員会

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、日本原燃株式会社再処理事業(防火帯設置工事)に伴い、令和元年度に事業地内に所在する沖附(１)遺跡の発掘調査を行いました。

六ヶ所村南部に広がる湖沼群の周辺には、本遺跡をはじめとする多数の遺跡が分布し、昭和46年以降の「むつ小川原開発事業」に始まる発掘調査により、貴重な成果が多く得られています。

本遺跡において、今回の調査では新たに発見されたものはありませんが、これまでには縄文時代や弥生時代、平安時代の遺構や遺物が確認されています。特に平安時代においては、竪穴建物跡が広範囲で見つかっており、大規模な集落が形成されていたことが明らかとなっています。

これらの成果が、今後の埋蔵文化財の保護等に広く活用され、地域の歴史を解明する一助となることを期待します。

最後になりましたが、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている日本原燃株式会社に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたり、御指導、御協力いただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

令和２年３月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長　鈴木　学

例　言

1　本報告書は、日本原燃株式会社再処理事業（防火帯設置工事）に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが令和元年度に発掘調査を実施した六ヶ所村沖附（1）遺跡の発掘調査報告書である。
2　沖附（1）遺跡の所在地は上北郡六ヶ所村大字尾駮字沖附地内、青森県遺跡番号は 411103 である。
3　発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した日本原燃株式会社が負担した。
4　発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。
　発掘調査期間　　令和元年７月２日～同年９月６日
　整理・報告書作成期間　令和元年９月７日～令和２年３月 25 日
5　本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は抄録記載の編著者が担当した。
6　本書に掲載した地図（遺跡位置図）は、国土地理院発行の「電子地形図 25000」『陸奥横浜』・『出戸』・『戸鎖』・『尾駮』・『平沼』・『天ヶ森』を複写・加工して使用した。
7　測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅹ系による。挿図中の方位は、すべて座標北を示している。
8　遺跡内の基本土層にはローマ数字を使用し、色調表記は『新版標準土色帖 2014 年版』（小山正忠・竹原秀雄）を基に記録した。
9　本文・図中では、当センター既刊報告書は県○集と表記した。
10　発掘調査及び報告書作成における図面・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
11　発掘調査及び整理・報告書作成に際して、六ヶ所村教育委員会からご協力を得た。

目　次

序
例言
目次
第１章　調査の概要……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の方法……1
　第３節　調査の体制と経過……2
第２章　遺跡の環境……3
　第１節　遺跡周辺の地形と地質……3
　第２節　遺跡周辺の歴史的環境……5
第３章　調査の成果……9
　第１節　調査区の概要……9
　第２節　調査の成果……9
引用参考文献……12
写真図版……13
報告書抄録……18
奥付

図版目次

図１　遺跡周辺の地形と地質……4
図２　基本土層の柱状模式図……4
図３　周辺の遺跡……7
図４　調査区地形図……10
図５　これまでの発掘・試掘調査区と遺構分布図…11

写真目次

写真１　基本土層……13
写真２　調査開始時現況……14
写真３　調査区完掘……15
写真４　調査区完掘……16
写真５　作業状況……17

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

平成 30 年度に、日本原燃株式会社より再処理事業(防火帯設置工事)予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、青森県教育庁文化財保護課（以下、文化財保護課）に照会があり、これを受けて２者間で協議が行われた。本再処理事業(防火帯設置工事)区域については、周知の遺跡である沖附(１)遺跡登録範囲の中心部であり、本事業の緊急性から平成 31 年度に発掘調査を行うこととなった。

なお、沖附(１)遺跡についての土木工事等のための発掘に関する届出は、日本原燃株式会社から、平成 31 年４月 15 日付けで提出され、これを受けて青森県教育委員会教育長から、同年４月 22 日付で埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査の実施が通知されている。

また、本遺跡については、むつ小川原開発事業に伴い同開発事業予定地域内の埋蔵文化財について、昭和 46 年度から調査が進められており、昭和 53 年と平成４年には試掘調査が、昭和 59 年と平成５年には本発掘調査が行われており、試掘調査分は青森県埋蔵文化財調査報告書第 48 集と第 165 集に収録されている。本発掘調査分は第 100 集と第 202 集が刊行されており、本報告書は『沖附(１)遺跡Ⅲ』となる。

（小田川）

第２節　調査の方法

１．発掘作業の方法

工事用杭Ｌ№１～Ｌ№２間のうち、現道を除く部分を対象として調査を行った。

［測量基準点・水準点の設置・グリッド設定］　工事用幅杭を測量基準点・水準点として使用した。調査はグリッド法を用い、４ｍ四方を１グリッドとした。座標Ｘ軸にはアルファベット、Ｙ軸には算用数字を付し、呼称は南西隅のグリッドライン交点を用いて表した。原点 A-0 は X=106660.000・Y=42220.000 である。

［基本土層］　基本土層は任意の地点で確認し、上位から順にローマ数字を付けて呼称した。細分がある場合は小文字のアルファベットを付した。

［表土等の掘削］　トレンチ調査を先行し、状況を確認しながら重機を使用して掘削の省力化を図った。

［写真撮影］　原則として 35 ㎜モノクローム、35 ㎜カラーリバーサルの各フィルム及びデジタルカメラを併用し、基本土層の堆積状態、完掘後の全景、発掘作業状況等について記録した。デジタルカメラは約 1,800 万画素のものを使用した。

２．整理・報告書作成作業の方法

今回の発掘調査では遺構・遺物ともに確認されなかったが、周辺の遺跡も含め、これまでの調査成果を踏まえた図面類の整理と作成を行い、報告書を作成した。

［図面類の整理］　トータルステーションによる測量で作成した調査区地形図、基本土層断面図等のデータ整理を行い、既存の調査図面との整合を行った。

［写真類の整理］　35 ㎜モノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35 ㎜カラーリバーサルフィルムは記録内容ごとに整理し、タイトルを付けてスライドファイルに収納した。デジ

タルカメラのデータは、カラーリバーサルフィルムと同様に整理し、タイトルをつけてハードディスク・DVD等に保存した。

［トレース・版下作成］ 挿図は（株）CUBIC製「遺構くん」（遺構実測支援システム）とAdobe社製「Illustrator」を用い、トレースを行った。版下作成には、Adobe社製「Illustrator」及び「Indesign」を用いた。 （鈴木）

第3節　調査の体制と経過

調査対象面積4,000㎡うち、1,150㎡について令和元年7月2日～9月6日までの期間で発掘作業、その後引き続き令和2年3月25日までの期間で整理・報告書作成作業を行った。

［発掘・整理作業の体制］

調査主体　青森県埋蔵文化財調査センター

所長	鈴木　学
次長（総務GM）	川村　和夫
調査第一GM	小田川哲彦
文化財保護主幹	鈴木　和子
文化財保護主幹	佐々木雅裕
文化財保護主幹	小山　浩平

専門的事項に関する指導・助言

調査員	藤沼　邦彦	前国立大学法人弘前大学人文学部教授（考古学）
	三浦　圭介	青森中央学院大学非常勤講師（考古学）
	山口　義伸	日本第四紀学会会員（地質学）
	島口　　天	青森県立郷土館学芸主幹（地質学）

［発掘・整理作業の経過］

5月下旬～6月下旬　日本原燃株式会社・文化財保護課と協議を行い、発掘調査区や発掘作業の進め方などについて確認し、準備作業を行った。

7月上旬～7月中旬　7月2日に発掘調査器材などを現地に搬入した。環境整備後、トレンチ調査を先行し、土層の堆積状況および遺構・遺物の有無を確認した。その後、重機で表土剥ぎ、人力で遺構検出作業を行った。

7月下旬～8月中旬　遺構検出作業を進めた結果、遺構・遺物が確認されないことから、7月下旬に日本原燃株式会社・文化財保護課と県埋蔵文化財調査センターで今後の調査の進め方について協議を行い、調査期間を9月6日までに短縮することを決定した。

8月下旬～9月上旬　遺構検出作業終了後、基本土層の堆積状況および旧石器時代の遺物の有無を確認するため、深掘り作業を行った。深掘り部分は埋め戻しを行い、9月6日に調査器材を撤収し、現地での調査を終了した。

9月中旬～3月下旬　測量図と写真等、記録類の整理を行った。本遺跡と周辺遺跡の既存調査の成果を踏まえて図版作成、原稿執筆を行い、編集作業を経て報告書を刊行した。記録類の収納を行った。 （鈴木）

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡周辺の地形と地質

上北郡六ヶ所村は下北半島頸部の太平洋側に位置し、この周辺には北側から、尾駮沼、鷹架沼、市柳沼、田面木沼、内沼そして小川原湖などの大小の湖沼群が連なる。本遺跡は上北郡六ヶ所村大字尾駮字沖附地内に所在し、小川原湖北端の尾駮沼西方に位置する。

下北半島頸部の地形は吹越烏帽子を中心に発達する安山岩質集塊岩より成る基盤岩の隆起帯と、南側の鷹架層、砂子又層（甲地層）の緩やかな背斜構造によって形成されている。この背斜構造は南へと次第に沈下し、丘陵性台地を構成する段丘堆積層（野辺地層、高舘段丘堆積層など）により被覆されて、さらに南方に控える七戸および八戸平野の沖積原下へと潜行する。一方、第四紀の大部分の地層は侵食や変形を受けることなく原形を維持している場合が多い（大沼善吉 1971)。

遺跡周辺では海岸段丘の発達が顕著で、上位から吹越烏帽子段丘（標高 100 ～ 140 m)、長者久保段丘（標高 90 ～ 130 m)、甲地段丘（標高 60 ～ 100 m)、七鞍平段丘（標高 12 ～ 50 m）の４段が形成されているが、六ヶ所村周辺の甲地段丘に相当する段丘を「千歳段丘」と呼称する（山口義伸 1976)。これらの段丘のうち、本遺跡が立地しているのは、千歳段丘および七鞍平段丘へ連続する斜面上の標高約 55 ～ 58 mの地点である。遺跡の北側は千歳段丘面に谷頭をもつ小谷が東流していて、急峻な段丘崖となっている。一方、南側には東西方向に帯状な谷状凹地があって南北に起伏している(山口義伸 1986a・b)。

本地域の地質は新第三系中新統を基盤とし、その上位に鮮新統、第四系の更新統および沖積統が不整合に被覆している。新第三系の中新統は泊層、猿ヶ森層、鷹架層に、鮮新統は砂子又層（甲地層）に区分される。一方、第四系は野辺地層を基盤とする段丘が発達し、段丘構成層が被覆しており、河川、湖沼、海浜に沿う低地には沖積層が分布している。

新第三系中新統の泊層は安山岩質角礫岩および安山岩質集塊岩、安山岩質凝灰岩などで構成される火山性堆積物である。鷹架層は硬質な塊状シルト質砂岩やシルト岩から､鮮新統の砂子又層（甲地層）は軽石質凝灰岩を挟む黄橙色砂岩やシルト岩からなる。また、第四系下部洪積統の野辺地層はシルト岩や凝灰岩を介在する軟質な砂岩から構成される（山口義伸 1986a・b、松山力 1994)。

なお、本遺跡が立地する千歳段丘の段丘構成層は、千歳(13)遺跡が立地する千歳段丘の標高の高い地点では、斜交葉理の発達した砂層（野辺地層）に千歳段丘構成層としての茶褐色および黄褐色の粘土質火山灰層（層厚約 300 m）が不整合に堆積し、本遺跡の立地する、千歳段丘から七鞍平段丘へ連続する斜面においては、段丘構成層の堆積状況が不良で、下位より塊状で淘汰不良の中～粗粒砂層、火山灰質の砂質粘土層、そして粘土質の黄褐色火山灰層（二次的な風成堆積の状況を示す）の順で堆積している（山口義伸 1986a)。

調査区内の基本層序を図２に示す。

Ⅰ層：黒色土（10YR1.7/1）表土。上位のⅠａ層は整地用の盛り土。表土であるⅠｂ層は粘性・湿性に比較的乏しい腐植質土である。

Ⅱ層：褐色土（10YR2/3）粘性・湿性のある土質である。地点により欠如することが多い。白頭山－苫小牧火山灰（B-Tm）を含む可能性もある。

Ⅲ層：黒褐色土（10YR2/2）粘性・湿性のある土質である。

Ⅳ層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）Ⅲ層とⅤ層の漸移層である。

Ⅴ層：黄褐色砂質粘土層（10YR5/6）上位のⅤａ層（粘土質火山灰層）と下位のⅤｂ層（砂質粘土層）に分層されるが、前者は地点により欠如あるいは識別が不明瞭な場合がある。粘性・湿性があり、軟質で乾燥が進行するとクラックが発達する。なお、段丘構成層のうち、黄褐色ラピリ質浮石層（千曳浮石層 Cb.Ｐ）は、本遺跡の直近地域ではⅣ層直下に塊状の集積が点在する程度に分布する傾向にあるが、本調査区では欠落する点が注意される。おそらく本層以下は崩落土塊と考えられ、地形の形成過程とともに検証が必要である。

Ⅵ層：砂質粘土層。粘性・湿性があり、軟質で乾燥が進行するとクラックが発達する。Ⅵａ層は硬質で、Ⅵｂ層の酸化帯（５YR3/6）である。Ⅵｂ層はにぶい褐色砂質粘土（10YR4/4）と酸化帯である暗赤褐色粘土質砂（５YR3/4）の互層をなす。

Ⅶ層：褐色細粒砂層（10YR4/6）比較的硬質である。

（佐々木）

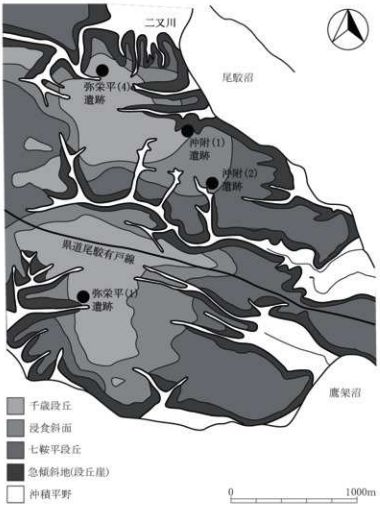


図１　遺跡周辺の地形と地質

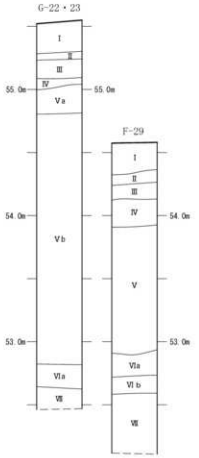


図２　基本土層の柱状模式図

第２節　遺跡周辺の歴史的環境

沖附（１）遺跡の所在している上北郡六ヶ所村は下北半島頸部の太平洋側にあって、この付近には北方から、尾駮沼、鷹架沼、市柳沼、田面木沼、内沼そして小川原湖の湖沼群がみられる。本遺跡は、海岸線から約４㎞内陸へ入った、尾駮沼西方 500 ｍ地点に立地している。

六ヶ所村には現在 150 カ所の遺跡が登録されており、その大半が湖沼群の縁辺及び平沼川流域に拡がっている（図３）。その種別を見ると、集落跡、狩猟場、貝塚などが多く、人が定住していた痕跡を示すものが多い。特に、貝塚は小川原湖周辺に多数分布しており、平成 26 年度から行われた県内貝塚遺跡群重点調査事業では村内に所在している貝塚 12 カ所の現地踏査が行われている（県 606 集）。また、村内の遺跡はこれまでに、むつ小川原開発計画に関連して、およそ 30 遺跡、515,000 ㎡もの調査が行われてきた。国重要文化財に指定されている大石平（１）遺跡出土の手形・足形付土版をはじめとする遺物 198 点、県重宝に指定されている表館（１）遺跡出土の細隆起線文尖底深鉢形土器など、数多くの貴重な遺物や遺構が発見されており、これらの発掘調査成果が青森県考古学の土台を築いてきたと言える。以下にこれまでの発掘調査の成果と文献から得られた縄文時代～平安時代までの歴史的環境を概観していく。

○縄文時代草創期（約 11,500 ～ 15,700 年前）

本遺跡周辺では、縄文時代草創期の頃から人間活動の痕跡を確認できる。御子柴・長者久保文化期に伴う石器群が幸畑（７）遺跡の千曳浮石層下位から、隆起線文土器とこれに伴う集石遺構が表館（１）遺跡の千曳浮石層上位から検出されている。これらの遺物は、千曳浮石層を鍵層としてその上下から出土しており、相対的な年代を知る上で貴重な検出状況を示している。

○縄文時代早期～前期（約 5,500 ～ 11,500 年前）

早期の白浜式の段階になると竪穴建物跡を伴う集落跡が営まれるようになる。上尾駮（２）遺跡Ｃ地区、表館（１）遺跡、幸畑（１）遺跡の３遺跡から検出されている。その後、集落跡は前期前半期まで断続的に営まれていくが、続く前期後半の円筒下層式の時期に入ると遺物は出土するものの竪穴建物跡が検出されなくなる。前期末葉の円筒下層ｄ式になると上尾駮（１）遺跡で、続く中期初頭の円筒上層ａ式では上尾駮（２）遺跡で竪穴建物跡が検出されるが、その数は少ないことから、前期後半から中期前葉にかけて本遺跡周辺における人間活動はまばらであったと想定される。

○縄文時代中期～後期初頭（約 4,300 ～ 5,500 年前）

本地域で再び活動が活発化するのは中期前葉の円筒上層ｃ式からである。富ノ沢（２）遺跡は中期前葉の円筒上層ｃ式から中期末葉の大木 10 式併行まで営まれた大集落であり、竪穴建物跡およそ 480 棟、そのほか、広場、掘立柱建物跡、配石遺構、土坑などが多数検出され、これらが広場を中心として規則的に配置された状況を示している。遺構検出数や遺物の出土数、内容は特別史跡三内丸山遺跡に匹敵する量である。時期別の竪穴建物跡数をみると、集落のピークは中期後葉の榎林式期にあり、これを境に徐々に竪穴建物跡数の減少がみられる。集落の最終期にあたる中期末葉の頃には、周辺の他遺跡からも竪穴建物跡が検出されはじめ、集落の縮小、分散化が認められる。中期末葉～後期初頭期の集落としては弥栄平（１）遺跡、大石平（１）遺跡、沖附（２）遺跡などがある。弥栄平（１）遺跡は女性骨の埋納甕棺が出土したことでも著名な遺跡である。この人骨は 18 ～ 19 才くらいと推定され、抜歯の痕跡等も確認できるなど骨の遺存状態が良かったものである。現在は複顔されて「縄文美子」として六ヶ所村立郷土館に展示されている。

○縄文時代後期前葉～晩期（約2,400～4,300年前）

前段階で分散化した集落跡は後期前葉になると再び大集落を営むようになる。大石平(1)遺跡、上尾駮(2)遺跡が代表的な遺跡である。大石平(1)遺跡は縄文時代後期初頭～前葉の集落跡で、竪穴建物跡、土坑、落とし穴、広場、柱穴群など多数の遺構が検出されているほか、国の重要文化財にも指定された手形、足形付土版や切断蓋付土器などが出土している。集落の最盛期は後期前葉期で約44棟の竪穴建物跡が検出されたほか、広場を中心として柱穴と土坑が円形に配置される集落構造が認められる。このような構造は上尾駮(1)遺跡でも共通している。しかし、六ヶ所村ではこの時期に続く大集落跡は発見されておらず、集落を構成していた住人たちがどこへ移り住んだのかは不明である。後期後半になると、上尾駮(2)遺跡、弥栄平(5)遺跡でわずかに検出される程度である。

晩期になると竪穴建物跡を伴う集落跡が検出されなくなる。しかし、上尾駮(1)遺跡C地区では晩期中葉の土坑墓が20基ほどまとまって検出されており、副葬品として翡翠製や、緑色凝灰岩製の玉類が759個（完形品のみ）出土しているほか、赤色顔料の塗布された紐状製品などが出土している。翡翠は新潟県糸魚川産の可能性が高いとの分析結果が得られていることなどから、遠方と交易を行うことができるほどの集落が存在していたと考えられるが、発見されていないため詳細は不明である。

○弥生時代（約1,700～2,400年前）

遺物は前期～後期まで出土しているが、竪穴建物跡を伴う集落跡は、大石平(1)遺跡、上尾駮(2)遺跡A地区から検出されたにとどまり、その規模は小さい。しかし、弥生土器が全時期を通して出土することや、集落跡が発見されることなどは、青森県全体で俯瞰すると注目される地域である。また、遺跡周辺から北へ行った泊の馬門遺跡からは籾痕土器が出土していることから、弥生時代に周辺で稲作が行われていた可能性は非常に高い。

○古墳時代～平安時代

古墳時代から奈良時代（8世紀代）にかけては、遺物、遺構が発見されていないが、平安時代の9世紀後半以降突如として集落跡が作られるようになる。沖附(1)遺跡、表館(1)遺跡、家ノ前遺跡、発茶沢(1)遺跡、上尾駮(2)遺跡、弥栄平(4)遺跡などがある。沖附(1)遺跡からは灰釉陶器（かいゆうとうき）、表館遺跡からは石帯（ベルト）などが出土しており、中央政府と交流のあったことが想定される。また、上尾駮(2)遺跡からは鍛冶場遺構が検出されており、集落内で小鍛冶が行われていたと考えられる。これらの集落跡は主に10世紀代にピークを迎えるが、11世紀前半代には終焉を迎える。

7世紀以降、県南地方で馬産が行われていたことが文献、及び考古資料により裏付けられている。7～8世紀は八戸市鹿島沢、丹後平古墳群、七戸町貝ノ口遺跡などから馬具や馬の骨が出土しており、既に馬産が行われていたことがうかがわれる。また、8世紀末～9世紀前半にかけては、王臣及び国司が争って陸奥国産の馬を買い漁ったことにより、利潤をむさぼるものや馬を盗むものが増えるなど世情不安が起き、陸奥国の馬を都に売却することが禁じられるほど、都にて注目される存在となることが『類聚三大格』に記されている。また、『延喜式』では、10世紀にはその禁令も形骸化し陸奥国産の馬は国内最高値段で取引されていることが記されている。そして、10世紀以降になると「おぶちの駒」がしばしば歌枕に登場するようになる。この「おぶち」が現在の尾駮に比定されるかどうかは諸説があり定まっていないが、東海大学では六ヶ所周辺で馬飼いが行われていた痕跡を探して、2014年度から金堀沢遺跡及び周辺の調査を継続的に進めている。（小山）

55
9
118
49
48
100
13
99
130
102
116
65
103 沖附（１）遺跡
96
104
128
57
40
127
39
19
129
124
126
45
120
38
115
109
122
37
35
33
34
32
107
83
6
77
150
22
28
20
63
1
133
16
15
★ 貝塚
0
5km
1/75,000

図３　周辺の遺跡

遺跡番号	遺跡名	時代	種別	所収
411001	唐貝地貝塚	縄文(早・前・中・後・晩)	貝塚 重要遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書　第606集ほか
411006	八森遺跡	縄文(中・後)	集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書　第606集ほか
411009	老部川(1)遺跡	縄文(早・前)	散布地	六ヶ所村埋蔵文化財調査報告書　第5集
411013	上尾駮(2)遺跡	縄文(早・前・中・後) 弥生、平安	集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書　第112集、113集
411015	中志(1)貝塚	縄文(前・中)	貝塚	青森県埋蔵文化財調査報告書　第1、606集
411016	中志(2)貝塚	縄文	貝塚	青森県埋蔵文化財調査報告書　第1集
411019	表館(1)遺跡	縄文(早・前・中・後)	集落跡 貝塚	青森県埋蔵文化財調査報告書　第3、42、50、61、 91、120、121集
411020	湯ノ沢(1)遺跡	縄文(早・前・後)	貝塚	青森県埋蔵文化財調査報告書　第1、606集
411022	六原(1)遺跡	縄文(中・後)	貝塚	青森県埋蔵文化財調査報告書　第1、606集
411028	田面木沼貝塚	縄文(早・中・後)	貝塚	青森県埋蔵文化財調査報告書　第1、606集
411032	幸畑(1)遺跡	縄文(早・後)	集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書　第1、36、125、236集
411033	幸畑(2)遺跡	縄文(前)	貝塚	青森県埋蔵文化財調査報告書　第1、606集
411034	幸畑(3)遺跡	縄文(早・後)	集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書　第1、42、222集
411035	幸畑(4)遺跡	縄文(中・後)	散布地	青森県埋蔵文化財調査報告書　第1、36、236集
411037	幸畑(6)遺跡	縄文(後)	散布地	青森県埋蔵文化財調査報告書　第1、36、222集 六ヶ所村埋蔵文化財調査報告書　第2、3集
411038	鷹架貝塚	縄文(晩)	貝塚	青森県埋蔵文化財調査報告書　第1集
411039	発茶沢(1)遺跡	旧石器 縄文(早・前・中・後) 奈良、平安、近世	集落跡 狩猟場 重要遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書 第1、3、9、24、50、67、96、116、120、126集
411040	弥栄平(1)遺跡	縄文(中・後) 奈良、平安	散布地 集落跡 生産遺跡 重要遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書 第1、3、42、94、98、439、446、549、559集
411045	鷹架沼南貝塚	縄文	貝塚 重要遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書　第1集
411048	富ノ沢(1)遺跡	縄文(早・前・中・後)	集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書 第1、9、118、132、133集
411049	富ノ沢(2)遺跡	縄文(早・中・後・晩) 弥生	集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書 第1、24、28、118、132、133、137、140、143、147集
411055	老部川貝塚	縄文	貝塚	青森県埋蔵文化財調査報告書　第1集
411057	弥栄平(2)遺跡	縄文(後) 奈良、平安	散布地 集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書 第1、28、42、81集
411063	湯ノ沢(2)遺跡	縄文(中・後)	貝塚	青森県埋蔵文化財調査報告書　第1集
411065	弥栄平(4)遺跡	縄文、奈良、平安	集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書　第1、106集
411077	千歳(13)遺跡	縄文(早・前・後) 弥生	集落跡 重要遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書　第10、18、27集
411083	睦栄(6)遺跡	縄文(早・後)	散布地	六ヶ所村埋蔵文化財調査報告書　第1集
411096	家ノ前遺跡	縄文(早・前・後) 弥生、奈良、平安	散布地	青森県埋蔵文化財調査報告書　第24、48、148、160集
411099	大石平(1)遺跡	縄文(早・前・中・後) 弥生	集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書 第24、28、90、97、103集
411100	大石平(2)遺跡	縄文(早・前・中・後) 弥生	集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書 第24、90、97集
411102	上尾駮(2)遺跡	縄文(早・前・中・後) 弥生、平安	集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書　第48、114、115集
411103	神附(1)遺跡	縄文、弥生、奈良、平安	集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書　第48、100、165、202集
411104	神附(2)遺跡	縄文(中・後)	集落跡	青森県埋蔵文化財調査報告書　第48、101集
411107	新納屋(1)遺跡	縄文(早・後)	散布地	青森県埋蔵文化財調査報告書　第28、256集
411109	新納屋(2)遺跡	縄文(早・後)	集落跡 重要遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書　第42、62、328集
411115	鷹架遺跡	縄文(早・前・中・後) 平安	集落跡 貝塚	青森県埋蔵文化財調査報告書　第63、160、606集
411116	弥栄平(5)遺跡	縄文(前・中・後)	散布地	青森県埋蔵文化財調査報告書　第28、106集
411118	老部川(2)遺跡	奈良、平安	散布地	六ヶ所村埋蔵文化財調査報告書　第4集
411120	幸畑(7)遺跡	旧石器 縄文(早・前・中・後)	散布地	青森県埋蔵文化財調査報告書　第94、125、148集
411122	幸畑(10)遺跡	縄文(早・中・後)	散布地	青森県埋蔵文化財調査報告書　第222集
411124	発茶沢貝塚	縄文	貝塚	
411126	表館(2)遺跡	縄文(後) 弥生、平安	集落跡 狩猟地	青森県埋蔵文化財調査報告書　第42、50、61集
411127	弥栄平(6)遺跡	縄文(中・後)、平安	散布地	青森県埋蔵文化財調査報告書　第138集
411128	弥栄平(7)遺跡	縄文(早)	散布地	青森県埋蔵文化財調査報告書　第138集
411129	弥栄平(8)遺跡	縄文(後)	散布地	青森県埋蔵文化財調査報告書　第138集
411130	富ノ沢(3)遺跡	縄文(中)	散布地	青森県埋蔵文化財調査報告書　第147集
411133	唐貝地遺跡	縄文(中)、平安	貝塚	青森県埋蔵文化財調査報告書　第145、606集
411150	平沼貝塚	縄文(中)	貝塚	青森県埋蔵文化財調査報告書　第606集

第3章　調査の成果

第1節　調査区の概要

沖附(1)遺跡は尾駮沼南西岸にあり、沼に面した段丘斜面からその背後に広がる平坦面にかけて立地する。北側は沼へ続く沢に面した急崖、南側は東西方向に長く延びる谷状の地形に挟まれている。標高は約 40 ～ 60 mである。谷状地形を挟んださらに南側には、縄文時代後期初頭の集落跡である沖附(2)遺跡が位置する。

今回の調査対象区は遺跡中央部からやや東寄りの場所に位置し、標高は約 54 ～ 58 m、西側から東側へ緩やかに斜傾する平坦面にある。調査区は、東西方向に延びる現道を挟んで南北2か所に分かれ、それぞれを北地区、南地区と呼称した（図4）。なお、南地区の西部は大きく削平されており、隣接部分の調査状況から遺構・遺物が残存していないと判断された範囲については調査を行わなかった。調査区の規模は、北地区は東西約 95 m、南北3～ 10 m、調査面積約 850 ㎡、南地区は東西 71 m、南北1～6 m、調査面積約 300 ㎡で、北地区と南地区の調査面積の合計は 1,150 ㎡である。

第2節　調査の成果

今回の調査区では遺構と遺物は確認されなかったものの、隣接地で行れた試掘調査では時期不明のピットが確認されている。

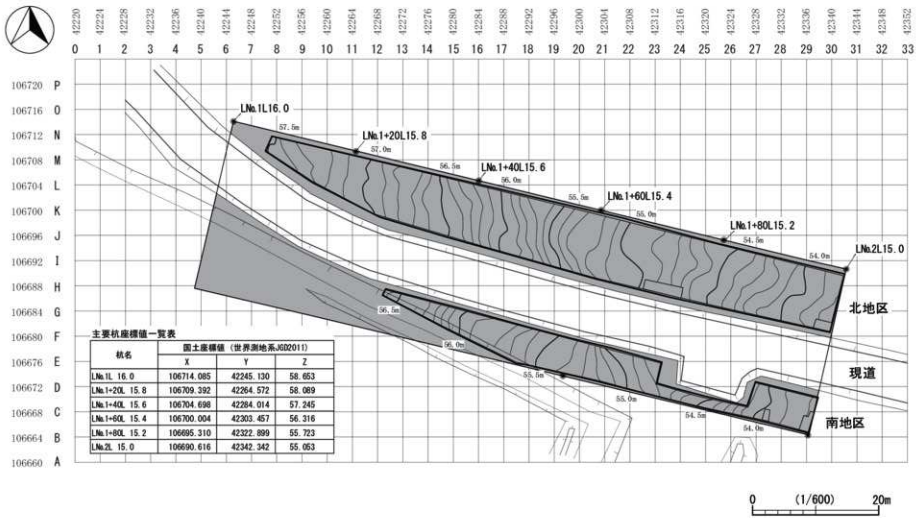
沖附(1)遺跡では、これまで数回にわたる発掘調査が実施されており、調査区は遺跡範囲のほぼ全域に及んでいる（図5）。これら調査の結果、本遺跡は縄文時代早期・中期～晩期、弥生時代後期、平安時代の複合遺跡で、主体は平安時代の集落跡であることが明らかとなっている。

平安時代の竪穴建物跡はこれまでに 38 棟確認されており、出土遺物や降下火山灰の堆積状況から概ね 10 世紀中葉を主体に構築されたとみられている。その一部には、カマドが付設された側を除く三方に周堤を巡らすものがあり、周辺遺跡でも同様のものは多く確認され、調査されている。これらの建物跡は地形的に分割される3地点にまとまっているが、全て沼に面した段丘縁辺部の斜面や平坦面にある。縄文時代の遺構は数少ないが、分布する範囲は平安時代と同様である。

一方、本調査区が位置する丘陵縁辺から離れた平坦面では、時期不明のピット1基が検出されているほか、土師器や縄文土器が少量出土しているにすぎない。遺構と遺物は存在するものの、その分布は極めて希薄な状況である。

このことから、本遺跡は、段丘縁辺部を中心に平安時代および縄文時代の集落が営まれたが、いずれの時期においてもその背後に続く平坦面の土地利用度は低かったとみえる。過去の調査は諸々の制約から地表面観察で確認した竪穴建物跡の調査を中心としたものであったが、それを考慮しても、遺構と遺物の分布は段丘縁辺部に偏在していることが推察される。

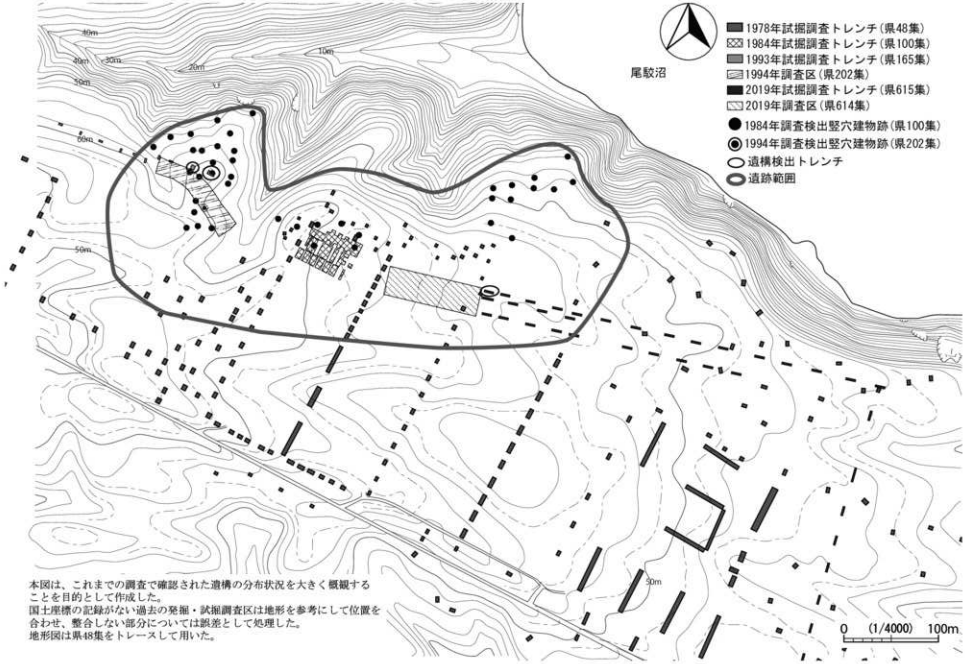
尾駮沼やその南側に位置する鷹架沼周辺では、家ノ前遺跡や上尾駮(2)遺跡、弥栄平(4)遺跡など9世紀後半～ 10 世紀代に位置づけられる遺跡が所在するが、いずれの遺跡も平安時代の主要な遺構は沼や沢に面した段丘縁辺で確認されており、段丘縁辺から離れた場所では弥栄平(1)遺跡で平安時代の土坑が確認されているが、その数は少ない。（鈴木）



主要杭座標値一覧表

杭名	国土座標値（世界測地系JGD2011）		
	X	Y	Z
№1L 16.0	106714.085	42245.130	58.653
№1+20L 15.8	106709.392	42264.572	58.089
№1+40L 15.6	106704.698	42284.014	57.245
№1+60L 15.4	106700.004	42303.457	56.316
№1+80L 15.2	106695.310	42322.899	55.723
№2L 15.0	106690.616	42342.342	55.053

図４　調査区地形図



本図は、これまでの調査で確認された遺構の分布状況を大きく概観することを目的として作成した。
国土座標の記録がない過去の発掘・試掘調査区は地形を参考にして位置を合わせ、整合しない部分については誤差として処理した。
地形図は県48集をトレースして用いた。

図５　これまでの発掘・試掘調査区と遺構分布図

引用・参考文献

青森県 1970 むつ小川原開発地域『土地分類基本調査』 平沼　国土調査

青森県 2001『青森県史 自然編 地学』

青森県教育委員会 1979『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報』青森県埋蔵文化財調査報告書第 48 集

青森県教育委員会 1986『沖附(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 100 集

青森県教育委員会 1994『青森県遺跡詳細分布調査報告書Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 165 集

青森県教育委員会 1996『沖附(1)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第 202 集

青森県教育委員会 2015『弥栄平(1)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 559 集

大沼善吉 1971「青森県むつ小川原地域の地質的特性について」『応用地質』第 13 巻第 1 号

新戸部　芳 1975「小川原湖の発達過程」『東北地理』27-1

松山　力 1994「遺跡周辺の地形・地質」『家ノ前遺跡Ⅱ・鷹架遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 160 集　青森県教育委員会

箕浦幸治・小菅正裕・柴　正敏・根本直樹・山口義伸 1998『青森県の地質』 青森県商工観光労働部鉱政保安課

日本考古学協会 2016 弘前大会実行委員会 2016『北東北 9・10 世紀社会の変動』研究報告資料集　一般社団法人日本考古学協会 2016 年度弘前大会第Ⅱ分科会

山口義伸 1976「遺跡周辺の火山灰層序について」『千歳遺跡(13)』 青森県埋蔵文化財調査報告書 27 集　青森県教育委員会

山口義伸 1986a「自然環境」『沖附(1)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 100 集　青森県教育委員会

山口義伸 1986b「自然環境」『沖附(2)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 101 集　青森県教育委員会

山口義伸 1993「遺跡周辺の地形及び地質」『家ノ前遺跡・幸畑(7)遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 148 集　青森県教育委員会

六ヶ所村史刊行委員会 1998『六カ所村史』上巻Ⅰ

北地区南壁［F-29 グリッド］基本土層（北→）

北地区南壁［G-22・23 グリッド］基本土層（西→）

南地区東側西壁［B-27 グリッド］基本土層（東→）

写真１　基本土層

北地区調査開始時現況（東→）

南地区調査開始時現況（西→）

写真２　調査開始時現況

北地区西半調査区完掘（西→）

北地区東半調査区完掘（東→）

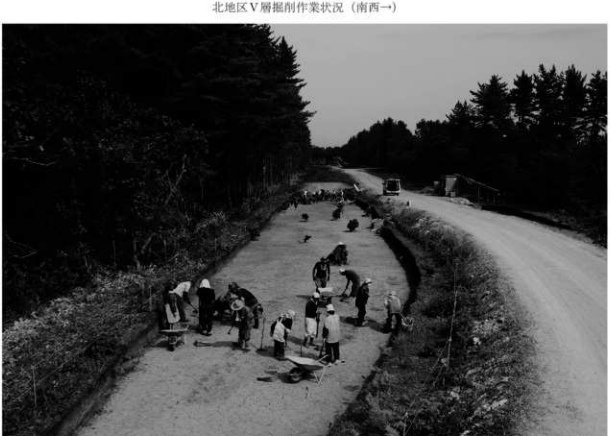
写真３　調査区完掘

南地区西半調査区完掘（東→）

南地区東半調査区完掘（東→）

写真４　調査区完掘

北地区Ⅴ層掘削作業状況（南西→）



北地区遺構検出作業状況（西→）

写真５　作業状況

報 告 書 抄 録

ふ り が な	おきづけかっこいちいせき
書 名	沖附(1)遺跡Ⅲ
副 書 名	日本原燃株式会社再処理事業(防火帯設置工事)に伴う遺跡発掘調査報告
シ リ ー ズ 名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第614集
編 著 者 名	鈴木和子、小山浩平、佐々木雅裕
編 集 機 関	青森県埋蔵文化財調査センター
所 在 地	〒038-0042 青森県青森市新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701
発 行 機 関	青森県教育委員会
発 行 年 月 日	西暦2020年3月11日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	世界測地系(JGD2011) 北緯	世界測地系(JGD2011) 東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
沖附(1)遺跡 (おきづけかっこいちいせき)	青森県上北郡 (あおもりけんかみきたぐん) 大字尾駮字沖附 (おおあざ とろかたざきおきづけ) 地内	02411	411103	40° 22′ 26″	142° 05′ 22″	20190702 ～ 20190906	1,150	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
沖附(1)遺跡	集落跡	—	—	—	—

要 約

沖附(1)遺跡は尾駮沼南西岸にあり、沼に面した段丘斜面からその背後に広がる平坦面にかけて立地する。北側は沼へ続く沢に面した急崖、南側は東西方向に長く延びる谷状の地形に挟まれ、標高は約40～60mである。今回の調査は、遺跡の中央部からやや東寄りの地点、西側から東側へ緩やかに斜傾する平坦面で実施した。

調査の結果、遺構・遺物ともに確認されなかった。本遺跡で実施されたこれまでの調査では、丘陵縁辺部の斜面と平坦面で平安時代の竪穴建物跡が多く確認されているが、今回の調査区周辺では、遺構・遺物は極めて希薄である。このことから、本遺跡では、平安時代には尾駮沼に面した場所に広く集落が営まれたが、その背後の平坦面はそれほど利活用されていなかったことが改めて明らかとなった。

青森県埋蔵文化財調査報告書 第614集

沖附(1)遺跡Ⅲ

－日本原燃株式会社再処理事業(防火帯設置工事)に伴う遺跡発掘調査報告－

発行年月日 2020年3月11日

発 行 青森県教育委員会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15

TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702

印 刷 高金印刷株式会社

〒038-0015 青森県青森市千刈2丁目1-31

TEL 017-781-2244 FAX 017-781-2509